大官大寺の縄文土器（2）

はじめに　本稿では、『紀要2009』に掲載した「大官大寺の縄文土器（1）」に続いて、大官大寺４次調査出土縄文土器の報告をおこなう。前稿では、土坑出土資料および中期末～後期初頭の土器を中心に報告した。今回は、まずは４次調査における縄文土器出土状況を確認したのち、後期中葉～後葉にかけての有文土器資料を紹介したい。

縄文土器の出土状況　縄文土器は、４次調査区の中で特に西北発掘区で出土している。そのなかでも、当時想定されていた「観世音寺式」伽藍配置の金堂相当部分の遺構状況を確認するため設定された下層調査区において集中的に出土した。４次調査区の土層は、①耕土（15㎝）、②床土（５～15㎝）、③褐色土（５～20㎝）、④暗褐色土（15～45㎝）、⑤灰褐色土（30～70㎝）、⑥地山からなる。このうち、大官大寺の時期の遺構面は、④の上面と思われるが、縄文土器の多くは、④および⑤から出土した。⑥の地山直上からは、北白川C式土器を含む土坑が検出されており、それらは『藤原概報８』および『紀要2009』で報告されている。地山直上の標高は約89.5m。出土土器は、中期末～後期初頭の資料が中心となるが、後期中葉～後葉の土器も一定量含まれ、出土地点は重複している。

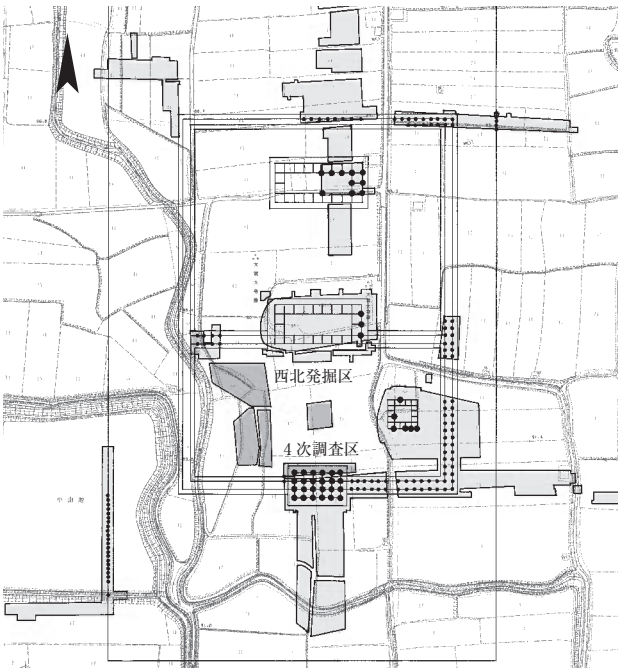

図80　大官大寺４次調査区位置図　1：4000

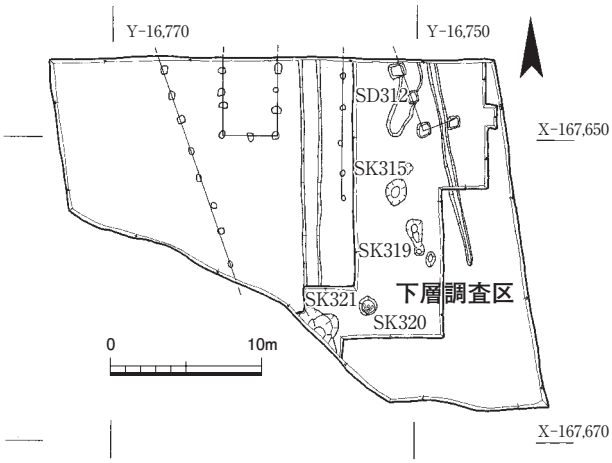

図81　大官大寺４次調査西北発掘区遺構平面図　1：500

縄文土器の様相　後期中葉～後葉までの資料のうち、口縁部片を中心に図82に示した。

１～９は縁帯文成立期の深鉢。１と２の波頂部には環状把手が取り付く。３～９は口唇部を肥厚拡大させるもの。口唇部上の文様として沈線と刻み（３・６～８）や、沈線とRL縄文（４）、沈線と円形押圧文（９）、沈線と貝殻刺突文（５）などがある。10は頸部に沈線と刻みをもつ鉢。このような鉢は、主に中国･四国地方でみられる。11～13は縁帯文土器とも呼ばれる北白川上層式土器。11は波頂部に円形押圧文と、そこから垂下する隆帯をもつ。12は充填縄文をもつ鉢。縄文の撚方向はRL。13は浅鉢。口縁内面に２条の沈線をめぐらす。14は短く内折する口縁部上に沈線と刻みをもつ。15は口縁部に円形押圧文と沈線をもち、沈線直下に斜位の刻みをもつ。14・15は蜆塚Ⅲ式に類似する。16は口縁端部を内面に折り曲げて肥厚させる。浅鉢ないしは注口土器の口縁部と考えられる。17～32は凹線文土器。17は広口口縁の深鉢。摩滅が著しく、凹線内が研磨されているか不明だが、凹線の凹凸は少ない。宮滝１式に比定できる。18～28は口縁部が「く」の字に屈曲し､口縁端部が外反する深鉢。凹線内に細かいスジが入るものが多い。20・22・27には小巻貝による扇状圧痕の一部が残る。22のみ粘土貼付のち、扇状圧痕をおこなうが、ほかは器面に直接押圧する。22・23は凹線が断面「レ」字状に段をもつ。29は波状口縁の深鉢。凹線は細く、沈線に近い。主文様は巻貝側面を縦位に押圧したと思われるが、判然としない。30・31は口縁部が大きく外反する浅鉢。30は口縁頂部に突起を

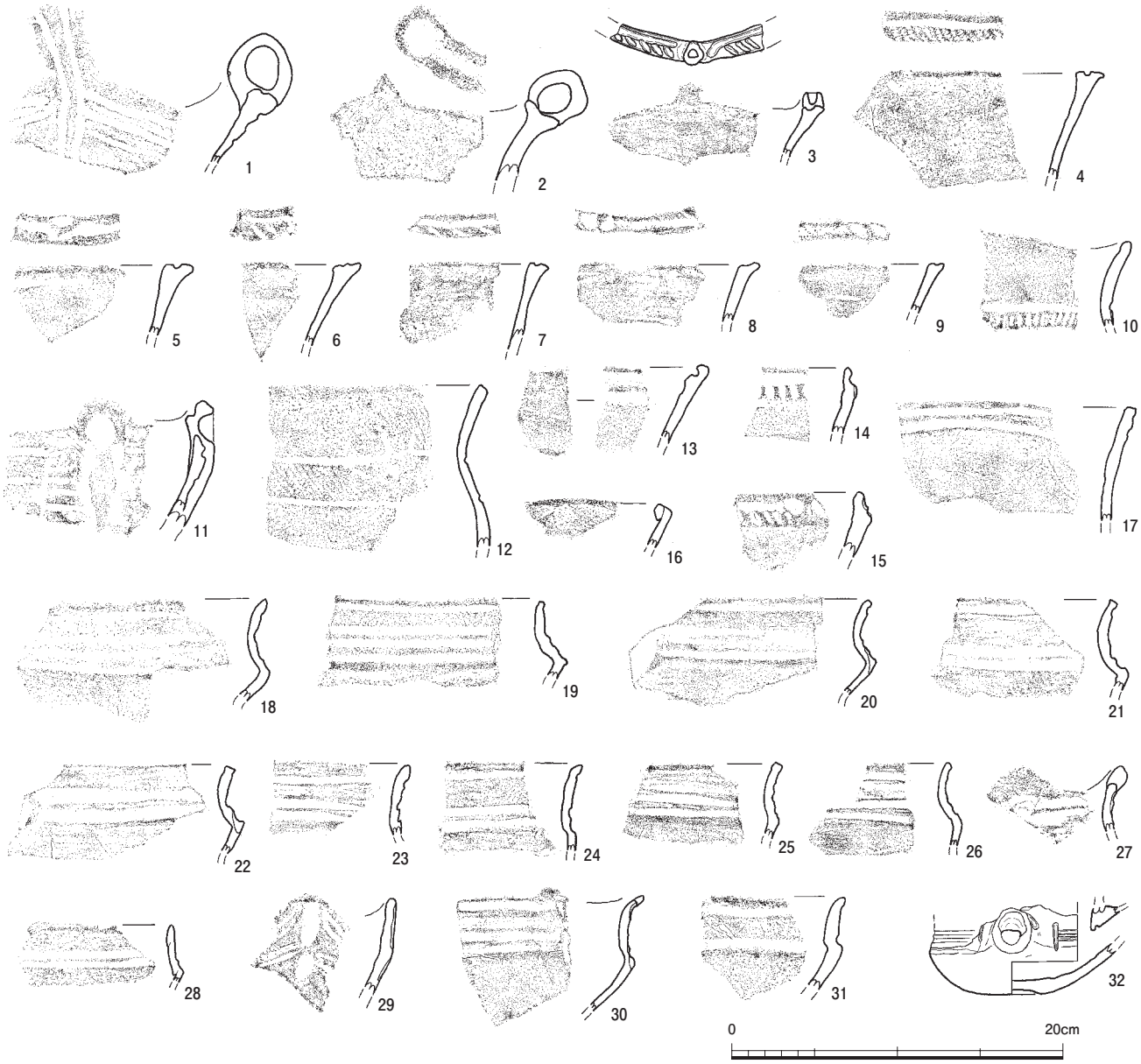

図82　大官大寺４次調査出土縄文土器　1：4

もち、その直下に粘土を貼付しない扇状圧痕を施文する。32は小型の注口土器。凹線をめぐらし、注口の両脇に縦位の短凹線を引く。底部は凹み底を呈す。18～32は宮滝２式である。なお、凹線文土器には角閃石を含むものが多く、18・29・32以外は全て角閃石を大量に含む。

まとめ　以上、大官大寺下層出土の縄文土器は、時期的に主に①北白川C式～中津式、②縁帯文成立期、③宮滝２式の３つのまとまりに分けられる。②の縁帯文成立期の土器様相は、縄文施文の土器が少ないことが挙げられる。縄文施文土器の減少は、近畿地方では福田KⅡ式以降起きる現象だが、縁帯文成立期でも継続していることがわかる。③に関しては角閃石を含む土器が多く、単純に口縁部のみであれば角閃石を含む割合は凹線文土器全体の81％にもなる。このことは、当該期の資料がまとまって出土した大阪府向出遺跡では角閃石を含む割合が8.9％という数値と比べると違いは顕著である（岡田憲一「胎土の構成とその通時的推移」『向出遺跡』大阪府文化財調査研究センター、2000）。今後周辺遺跡とも比較してこの違いが地域性か、遺跡の特徴なのかを検討する必要がある。

今回、紙面の都合上、有文土器のみを提示するにとどまったが、これまで不明であった後期中葉以降の土器様相を一部なりとも紹介することができた。しかし無文土器や底部など、提示できなかった資料も多い。今後別の機会に改めて報告し、大官大寺下層出土縄文土器に関する総合的な検討をおこないたい。

なお、掲載した縄文土器の実測および拓本は加藤雅士氏の手によるものである。記して感謝したい。

（石田由紀子）